[redacted]

富山日報

小天地

此頃小學校では何處でも競つて花やかに父兄懇話會を開くやうだ、家庭と學校の連絡に大切な機關だから競つてやるのも惡くはないが然し實際の價値は先生が各兒童の家庭訪問をするに比べて十分の一の價値もないことを忘れてはならぬ

臺灣製糖　東洋製糖　寶田石油

宇治電氣

高年會長西川吉三郎氏の發起にて來る二

十二日塚原村二口村新開發村其他附近の

等小學校にては來る二十二日父兄懇話會

を開くべしと▲入營兵士送別會

同牛舍設立認可申請中の處此程許可され

小杉[illegible]たるに付去十四日より建物の新築に着手

[redacted]

楠緒子女史を追想す

（上）

永代美知代

大塚楠緒子女史が御死去なすつた！まあ何と云ふことでせう、驚かないでは居られません、本當に人の命は解らないものですねえ。まさか楠緒子女史が御死去なさらうなどとは思ひも初めませんでしたが、これからが世盛りでいらつしやらうと云ふ御年齢でもつて、ヒヨックリ流行感冒位で御斃れなさる、大塚博士を初め御兄様方や御家族の御なげきばかりではない、もうあのスッキリした意氣な御作に接しることの出來ない文壇から云つ

[redacted]

ても、どんなに殘念だか解りません。

私が初めて楠緒子女史の御作を拜見しましたのは、最う今から十四五年も前、博文館からの閨秀作家集とか云つて、其頃盛んに書いてゐらつしつた一葉女史を筆頭に、稻舟女史だとか、小金井喜美子女史だとか、大塚楠緒子女史だとか、其頃の女流作家の短編を一つづつ出したのを出版しました。その閨秀作家集へ大塚女史が御書きになつたのは「黒眼鏡」と云ふので、私はまだほんの子供で、ろくに讀むことも出來ませんでしたが從姉が小說好きでして、大層よく出來てると云つては讚めほめしました、それを小耳にはさんで居たものですから、一通り文字が讀める頃になりますと、古い小說本を引張り出して讀みましたが、例の大塚女史の「黒眼鏡」が面白くつて堪りません何しろ十才にも足らぬ時分のことで、今どう面白かつたのかと聞かれましても、筋もなにも覺えては居りません、かと云つて文章の妙味の解りつこもなし、まあまあ兎に角小供心にも非常に面白かつたものらしいんですね、それから種々の雜誌やなぞに楠緒子女史の作が出ますと、乾度貰ふとか借りるとかして殘らず讀んだものでした。

[redacted]

普通通常郵便物午後四時半、書留通常郵便物午後四時、價格表記書狀午後四時、小包午後四時、爲替午後四時

發行所 株式會社富山日報社
電話 編輯用 [illegible] 事務用貳〇番
高岡支局 出町支局 魚津支局

第八千五百九十五號　富山日報　(木曜日)　明治四十三年十一月十七日

[redacted]

富山日報

小天地

地方の機業界の現代は手織機より力織に入らんとする過渡時期に屬しつつあるがお隣りの石川縣では李家さんの盡力で力織機研究會なるものを組織せしめ縣補助を給して熱心に力織機の研究を爲さしめ居れり縣下の當業者も一奮發して研究會樣のものを組織しては如何(花生)

[redacted]

楠緒子女史を追想す（下）

永代美知代

其内私も東京へ遊學するやうになりまして、段々文藝にあこがれる熱度も甚くなり、今の女子文壇と云つたやうな雑誌で其頃はやつた女子の友の發行所文友社などへちよいちよい遊びに行つたりしてゐました、其文友社の催したさる文學同好會と云つたやうな席上で初めて大塚楠緒子女史に御目にかかりました、たしか明治三十八年位のことと覺えます、品の好い大丸髷に御櫛をおあげになつて縞お召の襟がかつた二枚小袖に黒ちりのお羽織を召して、クリーム羽二重へ紫つぽい絞りを浮ばせた丸髷のお手柄がよくつて、今でも目さきをちらつきます、お傍に近付いて何とかお話が伺つて見たい―斯う

[redacted]

心に何度思つたか、だが恐れ多いやうな耻かしい氣がして久しい間只もぢ／＼して居ました、すると今の岡田八千代女史其頃はまだ小山内さんと仰有つて居た八千代女史が御出席になつて、大塚女史の傍へ御座りになり、いろ／＼御親密相にお話などなさる、八千代女史とは私も前から御知り合ひなものですから、其紹介で大塚女史からも御言葉を頂くやうになりました、大塚女史は八千代女史と同じに麹町富士見町小學校の御出身で、一つ橋の職業學校とかでぬいとりをお學びになつたこともあり跡見女學校で繪の方の御けいこをなすつたこともあるとか伺ひました、でも繪の方よりも文學の方に御自分の天才のおありのことを御知りになつて終に女流作家としてお立ちになつたんだ相です

後年のお作は夏目ばりだとか、どうだとか世間でもとり沙汰しますが私もやつぱり以前にお書きになつたものゝ方が好きですの、夏目ばりだのなんだの、そん

[redacted]

なことをなさらない方がどんなに立派な御文章か解りません「はれ小袖」と云ふのが出版されて居るやうですか、私はまだ拜見しません、併しまあ何と云つたつてスッキリとした、いきな美しい文章をお書きになる方でしたのに實は惜しいことを致しました、楠緒子女史には大層和歌のお上手な御嬢樣がお在りのやうに伺つて居りました、母樣のお兒ですから御成人後はさだめしと、せめては此お嬢樣に楠緒子女史の御遺業をついで頂きたいと囑望して居ります

[redacted]